

手放さない限り、 新たな可能性は見えてこない

入団三年目に受けた「戦力外通告」を、プロの世界にいたからこそ得られた「貴重な経験」と語る。引退後、上場企業にまで成長させた元Jリーガーの失敗の捉え方とは――。

経営者としての原点

ブランド品などのリユース事業を展開するバリエンスホールディングス(以下、バリエンス)の寄本晋輔さんは、二〇〇三(平成15)年までガンバ大阪に所属していた元Jリーガーだ。彼はプロの世界を退いた後、父親の営むリサイクルショップで働き始め、〇七(同19)年にはブランド品の買取専門店「なんばや」をオープン。さらにオークション業界にも進出し、一八(同30)年には東証マザーズ(現グロース)上場の鐘を鳴らした。そんな経営者としての原点につ



さきもと・しんすけ
1982年大阪府生まれ。関西大学第一高校卒業後、ガンバ大阪へ入団するも、3年で戦力外通告を受ける。引退後、父が経営していたリサイクルショップで経営のノウハウを学び、2011年、株式会社SOU(現・バリエンスホールディングス株式会社)を設立。

かけてした」

人生において最も難しいことは何か。その一つは、自身の強くこだわってきた世界を「手放すこ

と」だと寄本さんは考えている。たとえその瞬間が「挫折」や「失敗」だと感じられたとしても、物事に固執する限りは新たな可能性

も見えてこないからである。

自分を冷静に見つめる

経営においても寄本さんは一つの「成功」を手放すことで、事業を拡大してきた。例えば、ブランド品の買取価格ではなく体験価値に注力したことや、最大手のオークションプラットフォームでの商品の販売をやめたこともその一つだ。「最も大切にしていることを手放すのはパワーもいるけれど、固執するものを手放して客観的にならなければ、フラットに物事を見られませんか。自分たちを定義してしまうと、その定義の中でしか情報が入らなくなる。それが「戦力外通告」という挫折から学びだことでした」

また、寄本さんが「失敗」という言葉に触れるとき、もう一つ大切にしているのがそれを「前向きな撤退」と捉える姿勢だ。

「あきらめることや降参すること、ネガティブな選択ではないんです。僕は子どもの頃からずっとサッカーをやってきて、サッカーに人生の前半の大半を投資してき

ました。でも、あのとき『サッカーを続けたい』という感情に囚われていたら、どうなっていたか。引退が遅れてしまい、確実にバリエンスという会社も存在していなかったはず」

抱きかかえ、
手放せ！
寄本晋輔

失敗とは成長の機会

しての可能性を、あらためて見つめ直す時間でもあった。最初の頃は「なぜ自分だけが」とも思ったし、「僕よりもっと下手な選手だっているはずだ」という気持ちも湧いた。「でも、そうした感情を一旦横に置いて、自分自身のサッカー選手としてのパフォーマンスを客観視しました。一年、二年とかけて得られるものと失われるものを冷静に天秤にかけたとき、引退を決断するという選択肢のほうが、次の自分の人生に大きなものをもたらすと感じました」

そうして、寄本さんは父親の営むリサイクルショップを手伝うことにした。リユース事業の修業を始めたとき、「三〇〇〇円の冷蔵庫をメンテナンスして、それを一万二〇〇〇円で売る。その世界に本当に新鮮な楽しさを感じたんです」と彼は語る。ある人にとって不必要になったものを買い取り、それを必要とする人を見つけて売る。そのことによつて、価格が何倍にもなることの面白

さ――。それはサッカーからの「撤退」によって、初めて広がって見えたと自身の可能性だった。「佐川急便のチームで『なぜ僕は活躍できていないのか』なぜ思うようにいかないのか」と自分自身と向き合ったとき、こう思ったんです。サッカーを続けたいというのは自分の感情であって、その感情から自由にならなければ、選択肢を広げることができないんだ、と」

寄本さんはそのとき、「挫折」という言葉を「ターニングポイント」と言い換えてみたが続ける。「それだけでまったく違う世界が見えてきたわけです。だから、僕は『失敗』に対してすごくポジティブなイメージを持っていますね。失敗しないということでは、自分の感情に囚われて守りに入っている証拠。失敗とは成長の機会であり、成功するためのプロセスです。そして、自分の意思決定が正しいか、成功することのためにこそ、人は必死に努力することができ。だから、僕は失敗に対して何のストレスも感じないんですよ」